絵地図にみる森ケ崎界隈の今昔

面白い絵地図があります。これは大正末から昭和初期にかけての森ヶ崎地区のようすです。

この絵地図は観光宣伝用絵はがきの袋に描かれたものですから、旅館街が大きなスペースを取っています。実際は「養魚場」がこの地区の大半を占めていました。

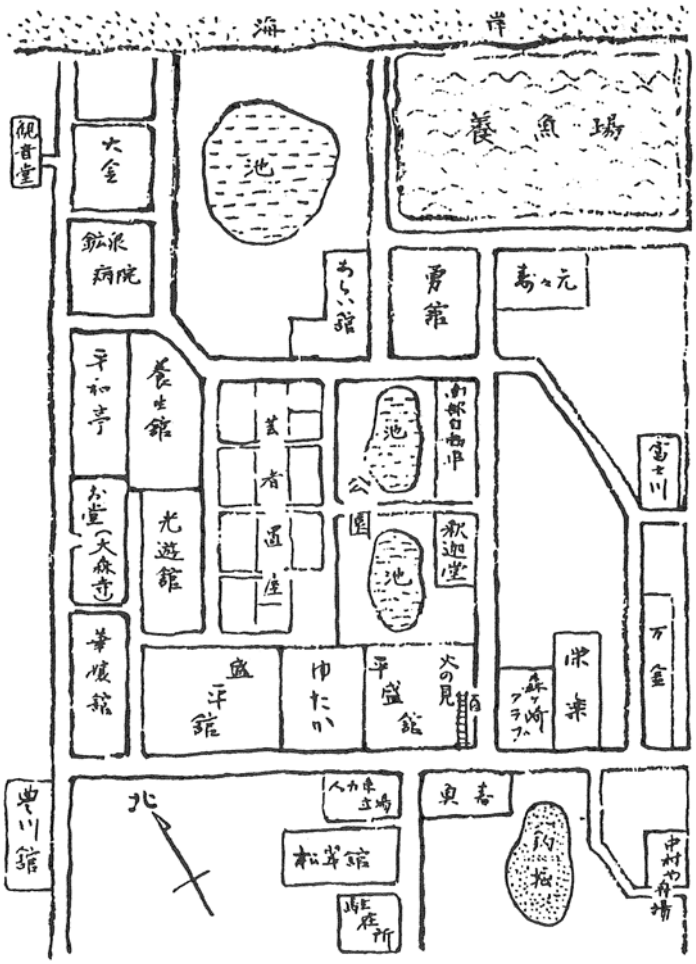
現森ヶ崎水処理センター（西）は養魚場から旅館「大金」にかけてと思われます。養魚場に（西）水処理施設がスッポリとはいる広さです。

「鉱泉病院」は戦後、労災病院となり、水処理センター正門と道をはさんで建っています。

「鉱泉病院」の跡地は、労災病院職員宿舎となっています。

「お堂」＝無縁堂（大森寺）は今もここにあります。この絵地図の頃を知る方は森ヶ崎にはほとんど残っていませんが、旅館「盛平館」と「平盛館」の経営者のご子孫が、森ヶ崎十字路にあるそば屋さんと米屋さんです。その名は屋号として残っています。

「観音堂」は大正まで海岸近くの葦原に建つ波除観音堂でしたが、森ヶ崎の名所となった「二つ池の公園」に昭和初期に移築（絵図では釈迦堂の位置）され、現在は法浄院（森ヶ崎観音堂）となっています。



▲　森ヶ崎地区の絵地図（大正末～昭和初期）

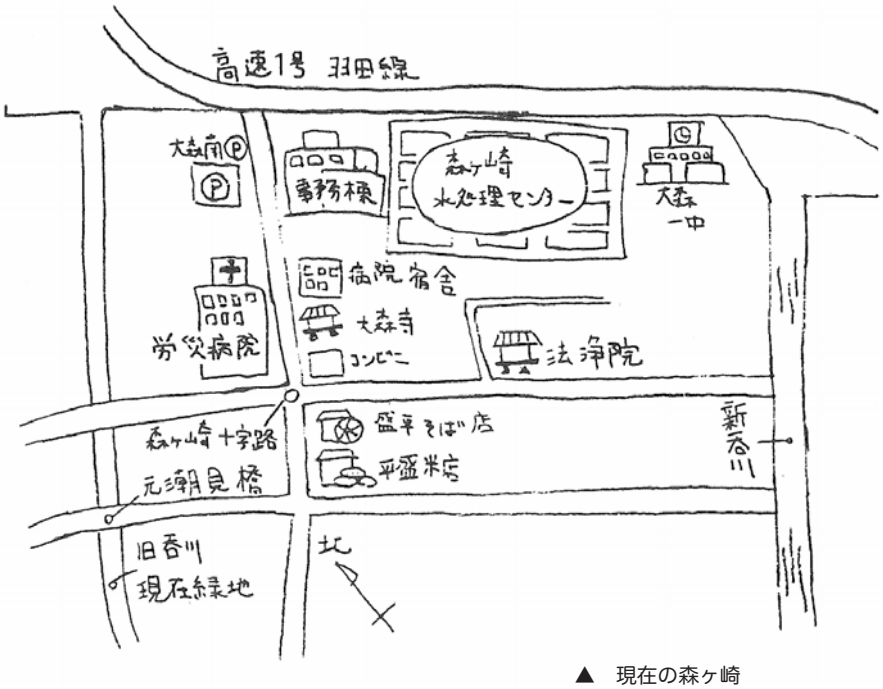
養魚場の北側が防波堤で森ヶ崎の海岸線が広がり、東側が新呑川です。この海は江戸前の豊かな漁場であり、江戸時代から続くのり養殖・浅草のりの産地でした。

ヒビと小さな漁船が点在する水面が海岸から望めた事でしょう。（ヒビ＝のり養殖などで胞子を付着・成長させるための竹や樹枝）

お堂の隣「華嬢館」の跡はコンビニエンスストアとなり、その角が今の森ヶ崎十字路にあたります。

そして絵図に描かれていて、今は無い旅館や料理屋の数々、それに芸者置屋など、職場界隈はまさに当時は三業地だったわけです。

それでは、森ヶ崎界隈今昔を略譜的におってみましょう。



▲　現在の森ヶ崎

干拓地森ヶ崎

大森や羽田は海岸に接し、広漠としたところでしたが、明治十年、土地の豪農により干拓がおこなわれ、数十町の地が拓かれました。そして「大森の

崎」と呼ばれていたのが縮まって森ヶ崎となったのだそうです。

それから徐々に人が移り住むようになりました。資料には「森ヶ崎の名は近年初めて世に知られたるものにして、図書に記す所なし」「明治二十三年再版陸地測量部の地図を検するに、ことごとく水田なり」とあります。一面の水田だったことがうかがえます。

鉱泉の発見

この海辺には昔から遺体がよくうちあげられました。旧くは維新の戦乱で敗れた幕臣、時代が下がって、関東大震災の被災者そして昭和の大空襲の時などです。

森ヶ崎のバス終点前にある無縁堂（現大森寺）は、慶応四年、船橋の戦に敗れて漂着した遺骸を葬ったものと伝えられています。

明治三十二年、この付近の農民が灌漑用水と参拝者用の手洗水を得ようと、無縁堂の一角に井戸を掘ったところ、鉱泉が湧き出しました。

その後、鉱泉の成分分析で医学上の効用が認められますと、「利を見るに敏なる人々は此処に鉱泉旅館兼料理店を開業し…」とあり、その後十年ほどで森ヶ崎鉱泉場は急速に形成され、鉱泉病院も開設されます。

元湯の所に最初の旅館として光遊館が建てられ、ついで盛平館が建てられました。

こうして明治三十年代から四十年代には旅館の数も増え、風光明媚、気候温暖なこともあって、東京近郊の保養地、湯治場として栄えていきました。

旅館の周囲には多くの池、釣り堀が掘られ、養魚場も作られました。

明治三十五、六年の森ヶ崎のようすが「保養を主として旅館に滞留して春は貝を拾い夏は汐浴をなし、秋は魚を釣り、冬はこもり居て雪を愛す等、時を追って興多し」と記されています。そして鉱泉病院が存在したことで、森ヶ崎は療養地としての性格も持っていました。



▲ 大森寺の石碑–左から幕臣の供養碑、鉱泉の碑、鯉供養碑

養魚場については「此地の南に関氏の養魚場あり四万坪の広地に鯉、ボラの類を養殖す」とあり、昭和元年には鯉十五トン、ボラ約四トンを出荷したと記録されています。

森ヶ崎文士村？

大正四年、時の大出版社の一つであった博文館専属の車屋が旅館「大金」を始めました。

出版社に関係があったせいでしょうか、大金には多くの作家たちが訪れています。

近松秋江、広津和郎、加能作次郎、徳田秋声、久米正雄、尾崎士郎、菊池寛、永井荷風、芥川龍之介、北原白秋などの著名な文士たちです。なかでも尾崎士郎は長期滞在し「人生劇場」の後半部分をここで書いたといわれています。「西の大金」に対して「東の万金」と呼ばれた万金旅館には、玉川勝太郎、松旭斎天勝など芸能人がよく訪れています。その他、政財界人、画家、相撲界の人々が森ヶ崎を保養地として利用しています。



▲ 大森森ヶ崎海岸絵はがき「よみがえる大田区の風景」より



▲ 現在の森ヶ崎海岸
高速道路とモノレールの橋脚に埋まっている

絵地図の時代

明治から大正時代にかけて保養地・湯治場として栄えた森ヶ崎は、関東大震災の後、鉱泉旅館街、歓楽街へと姿をかえていきます。

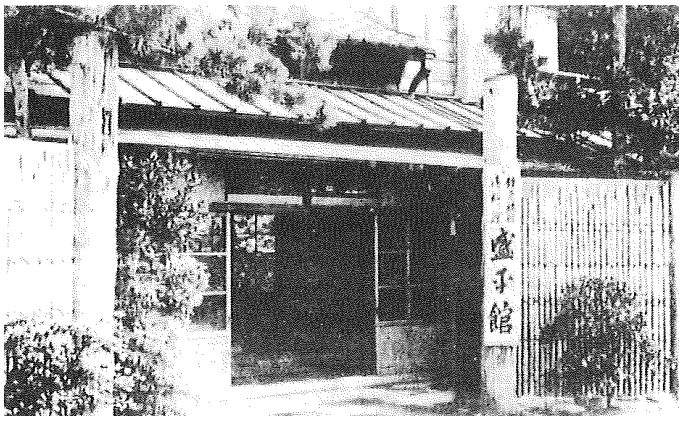
おそば屋さんから伺った話では、盛平館は震災後に再建されたそうです。震災では他の旅館・料亭も同じように痛手を受けたはずですし、その再建を機に鉱泉旅館街は様相を変えていったのでしょう。

又、昭和の時代に入り、隣の大森海岸の埋め立てが進み海水浴に好適とはいえなくなると、鉱泉宿をひかえた森ヶ崎が最も盛んな海水浴場として知られるようにもなりました。

尾崎士郎は『昔なつかし森が崎』の中で次のように記しています。

「雑木の繁みから風をつたって三味線の爪弾きの音が聞こえてきたり、竹藪の中の細道から湯道具を抱えた若い芸妓のなまめかしい姿がちらちらとうかびあがるようになった」

絵地図時代の森ヶ崎のようすをほうふつとさせます。小さな湯の街・森ヶ崎。



▲　震災後再建された盛平館玄関

飛行機墜落

昭和十三年八月二十四日、大森上空で日本航空輸送（株）のフォッカー機と日本航空学校のアンリオ機が接触墜落し、両機の搭乗員五名は全員即死、大森九丁目（当時）へ落ちたフォッカー機に近づいた群衆が、燃料タンクの引火爆発により大被害を受けました。

結局、死者合計八十五名、負傷者百数十人という戦前最大の惨事となりました。翌日の東京朝日新聞には、「最初バリバリと雷かと思った瞬間、屋内にいた芸者衆の日本髪がつぶれるほどの振動がありました」と、森ヶ崎でのインタビュー記事を載せています。

墜落現場に近い法浄院（森ヶ崎観音堂）に犠牲者の供養碑である地蔵尊が建立されています。

現在も、毎年八月二十四日に観音講中の人々によって供養が行われているそうです。



▲　航空事故供養碑

鉱泉旅館街の衰退

大正から昭和にかけてさかえた森ヶ崎鉱泉旅館街は、飛行機墜落事故と軌を一にするかのように衰退に向かいました。

昭和十年を過ぎる頃から戦争の影は色濃くなり、客足は遠のいていきました。さらに第二次大戦が始まると物資が不足し、旅館の経営も困難になり、京浜工業地帯の軍需工場に働く人たちの宿舎へと次々と転身していきました。

昭和十七年には養魚場も閉鎖に追い込まれ、昭和十八年には現在の大森第一中学校の東端（森ヶ崎水処理センター隣接地）に高射砲陣地が置かれます。そして日本各地が大空襲の被災を受けるのです。



▲　現在の森ヶ崎十字路

そして戦後

尾崎士郎は前述の『昔なつかし森が崎』や『思いでは楽しく』の中で戦後間もない森ヶ崎のようすを次のように書き残しています。

「ああ、森が崎　数々ののびやかなバカバカしく楽しい思い出を残しているこの一廓は今や、あとかたもなく私たちの視野の外に没し去った」

「空襲の被害だけは辛うじてまぬがれたものの、戦争中、軍需工場の工員宿舎にあてられていた鉱泉宿は（中略）どの家も、戸は破れ障子はこわれて見るかげもなく」

「昔の養魚場は、半ばちかく塵挨によってうずめられ、原形だけは僅かに残しているとはいうものの、葦の繁みに鳴く、よし切りのひそやかな風情なぞは想像すべくもない」

戦後、旅館・料亭は戦災者や引き揚げ者の寮となりましたが、耐用年数も過ぎ次々と取り壊されていきました。また、養魚場も焼け跡の残骸や呑川浚渫の泥で埋められて次第に空地となっていくさまが分かります。

最後まで残されていた旅館「光遊館」が取り壊されたのは昭和四十年頃の事です。こうして森ヶ崎鉱泉街は荒れ果てて、二度と復活することはありませんでした。

森ヶ崎の思い出（橋本氏談）

小田原北条氏支配の時代から大森に先相代々住む。江戸期には名字帯刀を許され十手も預かっていました。お祖父さんは、前述の幕臣の遺骸が漂着した際には、その供養に力を尽くした一人です。戦後まで漁業を営む。現ＴＧＳ、森ヶ崎事業所勤務。



▲　橋本伊之助さん

○　家は旧いので北条氏ゆかりの旗指物や刀剣類、十手などが残っていましたが、戦災で消失しました。

○　森ヶ崎は子供の頃の遊び場でよく通ったものです。梅森バス（梅屋敷と森ヶ崎間を結んでいた）で終点が「大金」の前です。裏の池でメダカやザリガニ捕りをしました。

○　養魚場は子供の腰くらいの深さで、中に入ると魚がコツコツぶつかってきたのを覚えています。養魚場の先が海岸線の堤で、松が植えてあり、それはいい景色でした。今の人に見せてあげたい。（笑）

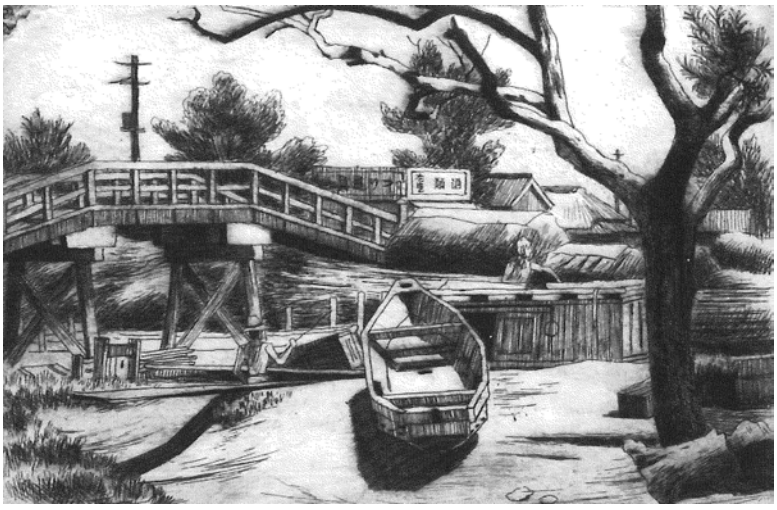
○　春先は潮干狩り。アサリは、よくだしのでる最上ものです。漁場も豊かで、スミイカが大漁で、船が沈みそうになって戻ってくるのを見たこともあります。

○　森ヶ崎は戦災を免れ、叔父さんの復員祝いでは、私が捕ったザリガニの尾っぽがすき焼きの肉がわりになりました。しかし、戦後の復興期に海は汚れ、昭和二十八年頃には海水浴はダメになり、わが家も生業から離れました。

○　最近はまた海もきれいになってきましたね。昔からの知り合いの中にもアサリ漁や遊漁船などで生計を立てている人もいます。呑川も随分と透き通ってきました。これは下水道の功績だと思いますね。

森ヶ崎水処理センター

昭和二十五年「東京都特別都市計画下水道」が正式決定され、処理場建設計画が持ち上がると、のり養殖や魚介類に与えるダメージを心配する漁民から反対運動が起こります。しかし、工場排水などで海は汚れ、漁業の生産性は落ち込み、昭和



▲　大東京名所 12 景（森ヶ崎）小栗慶太郎
旧呑川・潮見橋付近のり舟にヒビが見える
大田区立郷土博物館所蔵

三十七年の全面補償となり、浅草のりも終焉を迎えます。
森ヶ崎処理場の着工まで空地は野球グランドとなり、局内大会でも利用されました。ご記憶の方も多いと思います。

昭和四十一年　雨水ポンプ一部稼働
四十二年　西処理施設運転開始
五十年　東処理施設運転開始
五十三年　ミキシングプラント稼働
五十八年　森ヶ崎水処理センターに改称
同　年　南部スラッジプラント運転開始

現在、センター周辺は町工場の点在する下町風住宅街にその姿を変えています。

（文責　高橋）


▲　現在の旧潮見橋付近

参考文献

「大田区の文化財」　第十九集
「大田区の歩み」
「大田の史話」
「京浜国道」より　尾崎士郎
「大森漁業史」　大森漁業協同組合
「よみがえる大田区の風景」　大田区立郷土博物館